

ドストエフスキー「悪霊」における人物
考察
—ニコライ・フセヴォロドヴィチ・スタヴローギンとい
う人間—

法学部法律学科
4年E組
30408587
高橋裕介

一. はじめに

「悪霊」を初めて読んだ時、私は、物語の主人公ニコライ・フセヴォロドヴィチ・スタヴローギンのことを、微塵も理解できなかった。作中において彼は、容姿端麗、頭脳明晰、豪快不遜、といった美辞麗句で修飾される一方、不可解な言動や行動をみせ、暴力の限りを尽くしている。英雄と暴君、ニコライは両極端な二面性を持つ人物として描かれているが、私にはむしろ一面的にみえた。つまり、「悪霊」内において、ニコライ・スタヴローギンは何もしていないように感じられたのだ。私にはむしろニコライが極めて普通の人間一人間的な感性を持った人物に見え、19世紀だけでなく現代人に通ずる人間観を持った主人公に映った。なぜ作中の登場人物達が彼を英雄視するのか、そして、どうして彼に期待をかけるのか、私にはわからなかったし、彼らのニコライ崇拜に共感することもできなかった。逆に言えば、ニコライのような人物は今の日本に溢れているようにみえたのである。特に、「内面と外面の不一致」という点はさしたる珍しさもなかった。下巻の巻末に収録されている「スタヴローギンの告白」で語られる「屈辱によるカタルシス」や「自己批判に対し自己正当化を試みる自我」も、現代人にとって、あるいは現代の学生にとって、性格上の特異な要素とは思えず、いわばクラスに何人かはいる程度の人間、とすら思ってしまったのだ。だが、それだけに、作中でのニコライの「カリスマ性」は不思議でならなかった。無論、「美男子」であることが「ニコライ＝英雄的貴公子」という構図を作るのに一役買っているはずであったが、「悪霊」においてニコライが、ピョートルやシャートフ、そしてキリーロフといった重要人物に与えた影響を考えると、それだけでは説明がつかないように思われた。

以上のような疑念と疑問を解決するべく、私は人文科学研究会におけるレポート課題「人物研究」の対象を「ニコライ・フセヴォロドヴィチ・スタヴローギン」とし、「悪霊」の再読をはじめた。結論から言えば、私が初読時に抱いた感想の多くは、私の視野の狭さと作品への不理解が生んだものであった。つまり、スタヴローギンの「軟弱性」という一点のみをクローズアップして「悪霊」を読んだ結果、上記のような印象を持ってしまったのである。スタヴローギンの真の「悪魔性」は、表層ではなく、深層部分の葛藤に隠されていた。一見して、一貫性がないように思われた彼の行動は、根源では一つに繋がりと、彼の語ったこと、起こした行動、書いた手紙、等等の全てに断片的に刻まれていたのである。確かに彼の悩みは人間的であった。だが、「人間的な」悩みに辿り着くまでの彼の感情の隆起こそ、常人にははかりしえない圧倒的なスケールを持った物語だったのだ。

本レポートでは、「悪霊」の主人公ニコライ・フセヴォロドヴィチ・スタヴローギンを内面的外面的に考察し、ドストエフスキーが描いた「悪魔的超人」の真実の姿を浮かび上がらせることを主題とする。いや、正確にはドストエフスキーが描いた生の「人間」のリアリズムに迫ることが目的であるといえよう。なぜなら、ニコライ・フセヴォロドヴィチ・スタヴローギンという感情を持たない「悪魔」に憑かれた主人公が、「人間」へと脱皮を試みようとする物語が「悪霊」であり、その葛藤の中にこそ、私達人間が持つ「感情」が刻まれていると思うからである。

二. スタヴローギン考察1 風貌と評判

ニコライ・フセヴォロドヴィチ・スタヴローギンがどのような人物であるのかを考察するにあたり、まずは作中における彼の外面的特徴と彼に対する各人の印象・評価から追っていく。

スタヴローギンは作中において、外貌、胆力、腕力、知力、のあらゆる点で並外れて優れた「英雄」として描かれており、スタヴローギンが初めて物語の舞台の町に現れた時、彼のことを記録者Gは以下のように記述している。

「年の頃二十五ばかりの非常に美しい青年」¹

「私がそれまで会っただれよりもまして優雅な紳士で、服装も超一流、物腰にしても、最も洗練された上流の交際になれた紳士でなければとても真似できないほど垢抜けしていた。」²

また、町の反応については

「町全体がびっくりしてしまった。」³

「町の貴婦人連は、この新しい客人の出現に夢中になった。」⁴

としており、さらに彼自身の教養については

「彼がたいそうな教養に持主で、なかなか学識のあることもわかった。もっとも、この町の人たちを驚かすのに、そうたいした学識も必要でなかったが、しかし彼は、時事的な、きわめて興味深い輪台についてもちゃんと一家言をもっていい、しかも、とくに珍重されたのは、その意見が実に周到をきわめていることであった。奇妙なことだが、この町の人たちはこぞって、ほとんど第一日目から、彼がいたって思慮深い男であると決めてしまった。彼は口数の多いほうではなく、気取らない優雅さが身につき、驚くばかりつつましやかであったが、それでいて、この町のだれにも見られぬほど大胆で、自信にあふれていた。」⁵

としている。この時点で注目すべきは、町の人々がスタヴローギンを「口数の多いほうではな」いの、「彼がいたって思慮深い男であると決めてしまった」ことだろう。作品全体を通して、ニコライは多くを語らない場合が多い。後の、組織の同志たちの会合においても、彼は質問に答えないが、そのことが逆に「頭の良い」印象を与えている。⁶彼は「顔立ち」「微笑」、そして「沈黙」を上手く使うことで、町での地位を確立していった。つまり、スタヴローギンは、その容姿と完璧な立ち振る舞いによって、ほとんどなにもせず町の貴公子の座を射止めたといえる。

では、スタヴローギンを知る人物達は彼のことをどう捉えていたのか。ペテルブルグ時代からのスタヴローギンと交際のあるキリーロフとピョードル、さらに脱獄囚のフェージカは彼のことを以下のように評している。

キリーロフ

「鋭い才知と健全な判断力をもった人物」⁷

ピョードル

「きみは頭領です、きみは太陽です」⁸

フェージカ

「ほんものの神様の前に出たような具合」⁹

このように、スタヴローギンに出会った人々は一様に彼を常人ならざる人物としてみている。多く語らないはずのニコライではあるが、彼は美男子という外見的特徴を超えた絶大なカリスマ性を有していることが伺える。だが、スタヴローギンは「ただの英雄」ではない。彼を知る人達は彼の頭脳や英雄ぶりを認めつつも、別の側面からの評価も与えている。

¹ ドストエフスキー/江川卓(訳)「悪霊(上)」新潮社(1971)42版 74頁

² 前掲注(1) 75頁

³ 前掲注(1) 75頁

⁴ 前掲注(1) 75頁

⁵ 前掲注(1) 75頁

⁶ ドストエフスキー/江川卓(訳)「悪霊(下)」新潮社(1971)36版 106頁、138頁

⁷ 前掲注(1) 188頁

⁸ 前掲注(6) 153頁

⁹ 前掲注(1) 495頁

ワルワーラ

「夫人は明らかに息子を恐れているふうで、彼の前へ出るとまるで奴隷のように見えた」¹⁰
「考え方にある種の癖とか、何か特殊なものの見方に傾きやすい傾向とかはあったかもしれませんが。」¹¹

キリーロフ

「ときどき妙だと思ったことがある」¹²

レビヤートキン

「あの男にはかなわん。賢しき蛇だ。」¹³

「そうだ、気がふれている。非常に聡明だが、もしかすると、気がふれている」¹⁴

「そりゃ、あんな変人のことだから、何をやらかすかわかりゃしない。人に悪をもたらすために生きているような男だから。」¹⁵

リプーチン

「ですが、問題は女性ですな。愛の神も顔負けの、翼をもった地主さま、女殺しのペチョーリン殿でいらっしゃるんだから！」「あなたも、わが王子の侵入を恐れて、ドアに鍵をかったり、ご自分の家の中にバリケードを築いたりするようになりますよ！」¹⁶

カルマジーフ

「色魔」¹⁷

マブリーキー

「よけいな血が一しぶき飛んだからって、それを気にするようなあなたですか？」¹⁸

これらの評価は主に「気がふれている」という点と「女好き」であるという点に集約できる。ここで留保すべき点として、スタヴローギンを「気違い」と評した人間も、他方では彼を才知ある人間と認めていることが挙げられる。古来より、天才と奇人の差は紙一重と評される場合があるが、スタヴローギンの場合、同一人物から二つの異なる印象で見られている点に注目したい。作中の人物のほとんどが、ニコライをただの「天才」とも「気違い」ともみていない。彼は「気違いだけど、天才」「天才なのに、気違い」という両極端の評価を、矛盾なく持ち合わせているのである。この部分は、スタヴローギン自身が隠しきれていない彼本来の姿を現しているのではないかと思う。後の章で、スタヴローギンの内面を考察する際にも触れていきたい。

以上のように、華麗な英雄的風貌を持ちながらも、対極の行動を取るスタヴローギンに対して、社交界の評価も二転三転する。上述のように、彼が最初に町に帰還した時、「町全体がびっくりしてし」て、貴公子の来訪を歓迎していた。しかし、ニコライがガガーノフを引き回し、知事の耳を囁む、という奇行を披露すると、その評価は一変する。「すさまじい憎悪の爆発」¹⁹が起こったのである。しかも、記録者Gによれば、町には「この奇怪な振

10 前掲注(1) 78 頁

11 前掲注(1) 186 頁

12 前掲注(1) 188 頁

13 前掲注(1) 189 頁

14 前掲注(1) 190 頁

15 前掲注(1) 518 頁

16 前掲注(1) 193 頁

17 前掲注(6) 61 頁

18 前掲注(6) 82 頁

19 前掲注(1) 82 頁

舞いを精神かく乱に帰するものがない」²⁰く、「町の人々は～そうした行為を暗に期待する気持ちをもっていた」²¹という。また、奇怪な振る舞いが「幻覚症状」に因るものと結論づけられた後、スタヴローギンがイタリアへ旅立つ際も、町の人々は「だれもが、見たところ、深い同情の気持ちから彼を迎えたようだったが、そのくせ妙にどぎまぎしてしまって、彼がイタリアへ行くことを喜んでいた」²²とされている。そして、三年後、彼が再び町に舞い戻った直後に、マリヤ、リザヴェーダ、シャートフとの間に諍いを起こしたことが明るみにでると、「町の社交界がニコライに対していただいていた旧い敵意がはっきりとまた表立」²³ち、「きそって彼を非難」²⁴したのである。その一方で、彼の評価はきっかけさえあれば、再び「期待」へと変化してしまう。ガガーノフの息子との決闘の後、社交界はスタヴローギンを「絶対支持」²⁵する態度をとる。これまでとは正反対の、手のひらを返したような状況が生まれるのである。曰く、「これまでだれも見損なっていた新しい人物、ほとんど理想的ともいえるほどに厳正にもものけじめをつけられる新しい人物が登場」²⁶、「明星の出現」²⁷、「四年前に彼があれほどきらわれるもとなった傲慢さも、例のむつつりした近寄りがたさまだが、いまはかえって尊敬され、好かれる」²⁸、といった按配になる。

人心を掌握する圧倒的なカリスマ性を持ちつつも、ニコライ・スタヴローギンという男は憎悪の対象になりやすい。しかし、その憎悪を一瞬にして反転させる魅力をも持ち合わせているのがスタヴローギンなのである。無論、彼に対する評判が覆る時は、ピョードル達の暗躍に因る部分も大きい。だが、ピョードルにせよ、ユリヤ夫人にせよ、あるいはシャートフ、キリーロフ、そして他の同志たちにせよ、「ニコライ・スタヴローギン」を神聖視する傾向が彼らの根源にあるのは否めないのだ。そして、ピョードル達の評価が根となって、社交界という枝葉に、「スタヴローギン＝英雄」といった認識が広がっていったのである。つまり、社交界を動かす中心人物を納得させる「何か」をニコライ・スタヴローギンは持っていたと言えよう。

では、その「何か」とは一体なんなのか。スタヴローギンを英雄足らしめる理由は何に還元できるのだろう。この章では、ニコライの外的評価と容姿に絞って論を進めるため、内面についての言及は避けるが、彼の魅力を支える一端として、美顔とは別の「容貌」の力があると考えられる。それは、「仮面」と「微笑」「沈黙」である。本編中の記録者 G はスタヴローギンを初めて見た時、以下のようなことも書いている。

「私は彼の顔にも衝撃を受けた。」²⁹

「何かこういやに黒々とした髪の色、妙に落ちつき返って澄んでいる淡色の目、やけにこようなよやかで抜けるように白い顔の色、何かこうあまりに鮮やかな頬の紅み、真珠を並べたような歯、珊瑚のような唇——、一口で言って、絵に描いたような美男子なのだが、それでいて何か嫌悪感を感じさせるのである。」³⁰

「彼の顔は仮面のようだという評判だった。」³¹

20 前掲注(1) 81 頁

21 前掲注(1) 82 頁

22 前掲注(1) 92 頁

23 前掲注(1) 399 頁

24 前掲注(1) 399 頁

25 前掲注(1) 563 頁

26 前掲注(1) 567 頁

27 前掲注(1) 568 頁

28 前掲注(1) 570 頁

29 前掲注(1) 76 頁

30 前掲注(1) 76 頁

31 前掲注(1) 76 頁

美男子でありながらも、ただの美顔ではない。英雄でありながらも憎悪の対象となることから明らかなように、スタヴローギンの外面的要素は、そのことごとくが対極の評価を同時に受けている。矛盾した、極めて不可解な人間であるスタヴローギンは、町の人々から道化と思われても仕方がないようにすら思える。だが、彼は道化にはならず、むしろ不可思議さを神秘的悪魔的魅力へと昇華させてしまう。そして、ニコライを「気違い」ではなく、「英雄」ないし「反英雄」のイメージに留めた大きな要因は「微笑」と「沈黙」であろう。悪霊において、彼は微笑んでいる描写が圧倒的に多い。ワルワラ夫人からマリヤとの結婚を疑われた時³²、決闘後に社交界の評価が反転した時³³、スタヴローギンはいずれも「微笑をおもむろに浮かべる」、「ただちに厳しい沈黙の中に閉じこもった」、「にやにやするだけで、あいかわらず沈黙」、といった行動をとったのである。仮面のような顔をした稀代の美青年の微笑。「仮面」「美男子」「微笑」「沈黙」。この4つが重なりあうことで、ニコライ・スタヴローギンは、不可思議な、それでいて魅力のある、悪魔的英雄的青年、としての外面を確立したのだと私は思う。美顔は好感を、仮面は恐怖を、微笑は親しみを、沈黙は謎を。人がある人物に興味を持つ理由は、正負どちらかの感情に因るが、スタヴローギンの外面は、その双方を満たすものであったといえる。故に、彼は英雄となり、反英雄になり、女性の憧れになり、嫉妬の対象になり、貴公子になり、悪魔になったのだ。

しかし、スタヴローギンが三年の時を経て町に戻ってきた時、彼には変化が起り始めていた。記録者 G もそれを感じとっている。

「世の中には、現れるたびごと、いつも何か新しい感じ、たとえばそれまでに百篇も顔を合わせていても、どうしても気付かなかったような新しい感じを浮かべている、そういう人相があるものである。」³⁴

「もうまったく議論の余地もない美男子に見え、当然、顔が仮面に似ているなどとは言えもしなかったことである。」³⁵

そして、現在のスタヴローギンと出会った人の多くは、彼の変化に戸惑う。シャートフは「どうかもう一度あのすばらしいあなたを見せてください」と嘆願し、マリヤ・レビヤートキンは「わたしの公爵はこんな人じゃない！」³⁶と叫ぶのである。だが、周囲の戸惑いに対し、スタヴローギン自身もまた戸惑う。「なぜみなが、その旗とやらをばくに押しつけようとするのですかね？」と言って、自分が英雄視されることを嫌うのである。

スタヴローギンは、自らの外面を構成する要素を組みあわせ、それらを他者に効果的に見せることで、愛憎入り乱れた興味をもたれる「英雄」になったと考えられる。だがしかし、作中における現在のニコライの言動は、英雄像を拒否し始めている。この矛盾はどういうことなのか。なぜ、彼は英雄であり続けられず、外面を捨てたがるのか。そして、そもそも彼の完成された「外面」はどのように作られたのか。このような疑問を氷解し、ニコライ・フセヴォロドヴィチ・スタヴローギンの深部に至るためには、外面の考察だけでは足りない。次章からはスタヴローギンの言動と行動から彼の内面を探っていくこととする。

三. スタヴローギン考察 2 過去

ここでは、ニコライ・フセヴォロドヴィチ・スタヴローギンの幼年期から 2 度目の帰還までの間を彼の「過去」として、その行動と内面の考察を行う。

まず、ニコライという人物の成り立ちについてであるが、彼の原初の形を創り上げたの

³² 前掲注(1) 349 頁

³³ 前掲注(1) 570 頁

³⁴ 前掲注(1) 347 頁

³⁵ 前掲注(1) 347 頁

³⁶ 前掲注(1) 530 頁

は、母親のワルワラ夫人と教育係のステパン・トロフィーモヴィチ・ヴェルホーヴェンスキーであったといえる。ニコライの父親であるスタヴローギン将軍は、彼が八歳の時点でワルワラ夫人とは別居状態にあり、そのため彼は女親の手ひとつで大きくなった。³⁷ワルワラ夫人は、ニコライを溺愛しており、ニコライ自身も

「たえず自分をじっと見守っている母親の視線を、病的なくらい、いつも肌で感じていた。」

38

とされている。また、彼の教育係として招かれたステパン氏は、ニコライを「なんの躊躇もなく、さっそく自分の親友に仕立て上げ」³⁹、深夜、ニコライに対し「傷つけられた自分の感情を涙ながらに少年に訴えたり、なにか家庭内の秘密を打ち明けたりするためだけに揺り起こ」⁴⁰したりすることで、「教え子を自分になつかせ」⁴¹た。

「悪霊」においては、ニコライの少年時代に関する記述は少なく、ニコライという人間がどのように形成されたかについての考察は難しいと考えるが、私見を述べると、ワルワラとステパンという二人の人間の間で幼年期を過ごしたニコライ・スタヴローギンは、「母親からの視線に応える擬態」と「理想主義者の美しいポーズ」を身につけたのではないだろうか。ニコライは母親の自分に対する溺愛を知っていたため、母親を満足させるだけの外面を構築しようとし、また、ステパン氏の行動から自分の行為が他人にどう映るのか、を知ったはずである。結果、彼は自分の中身よりも、まず外側への意識するようになってしまい、それは彼に終生つきまとう「(無意識下の)癖」になった。

そんなニコライ・スタヴローギンの行動が目に見える形で狂いだしたのは、彼が学校を卒業し、軍務についてペテルブルグで暮らし始めた後である。ニコライは「急になにやら気違いじみた放蕩をはじめ」⁴²、「奇矯なほどの羽目のはず」⁴³ようになった。彼は「ほとんど同時に二つの決闘沙汰」⁴⁴を起こし、「権利剥奪のうえ兵卒への功等、ある普通歩兵連隊勤務への流刑処分」⁴⁵を受ける。その後、意外に早く将官に復帰するものの、再び「妙な仲間にはいりこんで、ペテルブルクの屑みたいな連中」⁴⁶と付き合い、それを気に入ってしまう。そして、彼の蛮行は母親の願いを入れて故郷に帰還した後も収まることはなかった。

帰還後のニコライ・スタヴローギンは「これといった原因もなく、何人かの人に対して考えられもしない暴挙を働」⁴⁷き、街の人々を驚愕させる。そして、彼の奇矯な振る舞いは、起こした暴挙だけでなく、行動全般に及んだ。例えば、ガガーノフを引き回した際のニコライは、「当惑の色を見せるどころか、反対に毒々しい楽しげな微笑を浮かべて『いささかの後悔の色も見せなかった』」⁴⁸し、その行為の後も「ニコライは、だれに答えを返すでもなく、大声あげてわめいている人たちの顔をももの珍しげに見つめながら、しばらくそのあたりを歩きつ戻りつし、あたりを見回していた。そのうち、ふいにまた重いに沈みでもしたように～眉をひそめると～『むろん、赦していただけるでしょうね』」⁴⁹と言い放つたで

37 前掲注(1) 70 頁

38 前掲注(1) 70 頁

39前掲注(1) 70 頁

40前掲注(1) 70 頁

41前掲注(1) 70 頁

42前掲注(1) 72 頁

43前掲注(1) 72 頁

44前掲注(1) 73 頁

45前掲注(1) 73 頁

46前掲注(1) 74 頁

47前掲注(1) 78 頁

48前掲注(1) 80 頁

49前掲注(1) 80 頁

ある。また、リプーチンの妻の誕生パーティで妻にキスをした際は、『怒らないでください』と早口につぶやくと、外へ出ていった。⁵⁰

これら一連の凶行の中で注目すべきは、「謝罪の言葉」ではないかと思う。ニコライは、奇行の最中に彼が微笑を浮かべていることから考えても、その行為を楽しんでいることに間違いはない。しかし、彼はその後、2度とも赦しを乞うているのである。自分の行為を楽しんでおきながら、行為後に暴挙に対する赦しを求めるという矛盾。しかし、この矛盾は、一見狂っているようでありながら、実は彼が明確な意思をもっていることの表れではないかと思う。事実、ニコライは県知事との話し合いの後、発狂し、療養の旅にでることとなるが、街を離れる際にリプーチンから

「このうねなく賢い、このうねなく思慮深い方と考えていましたとも、うわべだけ、あなたが正気を失っているという話を信じたような顔をしていただけでね」⁵¹

と言われ、顔を青ざめさせている。さらに、故郷の町でニコライの記憶に一番はっきりと刻み込まれたのがリプーチンの「みすばらしい、いやしいばかりの姿⁵²」だったとしていることから、リプーチンの発言が真実を掠めており、蛮行時にニコライの理性が存在していた可能性が高いことを伺わせている。

では、なぜニコライ・スタヴローギンは理性を持ちつつも蛮行に及ぶのか。微笑の仮面を有したカリスマ貴公子として生きられないのか。この疑問に対する答えは、チホン神父に渡したニコライの文書の中で明かされる。文書の中でニコライは、ペテルブルグ在住時に出会った少女マトリョーシャがペンナイフをなくしとして親から折檻を受けている時、ペンナイフを発見したにもかかわらず、

「私の頭にはそのとき、娘をぶたせるために、このことを言わないでおいてやろうという考えがうかんだ。」⁵³

とした上で、以下のように書いている。

「こういう際、私はいつも息がとまりそうになる。」

「私は極度に不名誉な、並外れた屈辱的で、卑劣で、とくに、滑稽な立場に立たされるたび、きまっていつも、度外れな怒りと同時に信じられないほどの快樂をかきたてられてきた。これは犯罪の瞬間にも、また生命に危険の迫ったときにもそうなのである。」

「自分の卑劣さの底深さを意識することによって、陶醉を感じることだろう。私は卑劣さを愛するのではない（この点、私の理性は完全に全きものしてあった）、ではなくて、その下劣さを苦しいほど意識する陶醉感が私にはたまらなかったのである。」⁵⁴

さらにスタヴローギンは

「白状すると、私はしばしば自分から進んでこの感覚を追い求めたこともあり、頬打ちを食らった際に「怒りをこらえていると、快感が想像しうるかぎりのものを越えてしまうのである。」⁵⁵

と語っている。これこそがニコライが暴力に身を委ねる理由であり、蛮行時の微笑の真相であろう。彼は理由を求めて奇矯な振る舞いをするのではなく、振る舞いそのものによって得られる快樂が目的だったのである。では、ニコライは狂人であったのか。彼は特殊な性癖を持った、単なる気違いであったのだろうか。それは否である。少なくとも、ニコライ・スタヴローギンはそれを否定している。

50前掲注(1) 85 頁

51前掲注(1) 93 頁

52前掲注(1) 95 頁

53前掲注(6) 667 頁

54前掲注(6) 667 頁

55前掲注(6) 668 頁

「この感情がいまだかつて私を征服しつくしたことがなく、常に意識が全きままに残っていたことを、みなに知ってもらいたいためである」

「滅茶苦茶なほどにその感情に支配されることはあったが、われを忘れるということは一度もなかった。それが私の内部で火そのものようになっていっても、私は同時にそれを完全に支配することができたし、その絶頂で押しとどめることさえできた。」⁵⁶

つまり、ニコライ・スタヴローギンはカタルシスを得るためのみに蛮行に身を委ねる一方、己の行為に対して完全な理性を保っているのである。

しかし、そんなニコライ・スタヴローギンに恐怖を覚えさせるような事態が発生する。少女マトリョーシャとの淫行と彼女の自殺。私は、この事件こそがニコライを悩まし、そして彼が変わろうとするきっかけだったと考える。ニコライとマトリョーシャの間でなにが起こったのか、作中においてはニコライの文書が欠損したことになっており、真実はよくわからない。だが、「すべてが終わった」あと、ニコライが目覚まして感じたものは「最初の恐怖」⁵⁷であり、その後もニコライは断続的に恐怖し続ける。

「ふたたび恐怖を、それも先ほどとは比べものにならぬほど強い恐怖を感じた」⁵⁸

「このときばかりは私はおびえてしまい、ほんとうに恐怖を感じた。」

「ふたたび恐怖～それはもうどんな苦痛でもこれほどはげしくはあるまいと思われるほどはげしいものであった。」⁵⁹

最終的に「マトリョーシャの自殺」という形でニコライは恐怖から解放されるが、このゴロホウヤの事件はスタヴローギンの心に大きな影響を及ぼす。

「私は、解放の喜びにひたっている自分がいやしい卑劣な臆病者であり、自分がもうけっして高潔な人間になりえないこと、この世でも、あの世でも、けっしてなりえないことを、すでにそのときはっきりと悟っていたことを記憶している。」⁶⁰

「私は自分が卑劣な男であるということを経験しながら、それを恥ずかしいとも思わず、だいたいほとんど苦しむこともなかったからである。」

「私は生涯ではじめて、痛切に自分を定義してみたのだった。」

「私は善悪の別を知りもしないし、感じてもない男である、たんにその感覚を失ってしまったばかりでなく、善も悪もない男なのだ（これは私の気に入った）、あるのは一つの偏見だけ。また私はすべての偏見から自由になりうるのだが、その自由を手に入れた瞬間、私は破壊する。」⁶¹

この独白の件は多分に自己陶酔的であり、ニコライの真の心象として正しいかどうかは考慮の余地を残すと思われるが、少なくとも彼が自分を痛切に「自覚」したことは間違いない。そして、この自覚こそが、ニコライに変化を与える最初の波紋だったのだと思う。彼は自分の定義だけでなく、己の恐怖についても自覚してしまった。即ち、ニコライは自分が善も悪もない、なにも感じない存在だとしながらも、「恐怖」という源感情を知ってしまったのである。己を絶対的な超人と定義したにも関わらず、その定義の発端に在ったのは自分の「恐怖」であったという矛盾。ニコライはこの構図に苛立ち、さらなる醜悪により、自己の特殊性を演出しようとする。それがマリヤ・レビヤートキナとの結婚である。

「スタヴローギンがこのような最低の女と結婚するという思いつきが、私の神経をくすぐ

⁵⁶前掲注(6) 668 頁

⁵⁷前掲注(6) 677 頁

⁵⁸前掲注(6) 677 頁

⁵⁹前掲注(6) 678 頁

⁶⁰前掲注(6) 685 頁

⁶¹前掲注(6) 686 頁

った。これ以上醜悪なことは考えつけもしなかった。」⁶²

しかし、ニコライの内なる混沌は「結婚」という醜悪だけでは満足できなかったように思われる。なぜなら、彼はこの後、故郷の町へと戻り、そこで前述のような奇矯な振る舞いをするようになるからだ。この蛮行はニコライの欲求を満たすとともに、自分が悪魔的超人であることの証明にもなり、そして彼はその振る舞いによって「恐怖」を抱いた自分を否定したかったのではないだろうか。であるが故に、彼は故郷に帰ってきた時、精神的に不安定だった（即ち、発狂は演技であり演技でなかった）のではないかと思う。自らの書いた文書の中で、ニコライはマトリョーシャとの、「思い出を『どの程度支配』し、いかに『無感動になりえたか』を証明」⁶³しており、「私はいまでも、その気になれば、マトリョーシャを振捨てられることを知っている。」⁶⁴と語っているが、私はこの部分はニコライの見栄（＝嘘）ないか考える。一度芽生えた「恐怖」という感情は彼の心の底に残り、結果として「黄金時代の夢」と「マトリョーシャの幻」として現れるのである。

「私のまだ知る事のなかった幸福の実感が、私の胸を痛いほど刺しつらぬいた。」⁶⁵

「これが良心の呵責、悔恨と呼ばれるものなのだろうか？」⁶⁶

「恐怖」という感情を真に体感したことで、ニコライの中には更なる感情—「幸福」と「悔恨」—を求める欲求が生まれた。つまり、悪魔であることの自覚が、人間としてのニコライの発露となったのである。だが、同時に彼が幼年時から育んできた外面を装う「癖」も既に完成の域に達していた。普段のニコライは「貴公子」を演じる微笑を絶やすことがなかったし、醜悪なるモノへの暴走に走った時も自己弁護を忘れることがなかった。この点はチホン神父の指摘（「あなたの告白はある部分は文章の力で強められている。あなたはご自分の心理にいわばうっとりされて、実際にはあなたのうちに存在しない非情さで読む者を驚かせようとしておられる。」⁶⁷）からも明らかである。

自己の探求をおこないながらも自分を壊せない。あるいは、ニコライ自身なにが芽生えなにを壊そうとしているのか気付いていない。その葛藤こそが2度目に帰還した後のニコライに常に付きまとい、己をさらけだそうとする欲求と自分を保とうとする欲望の間で、彼は悩み、周囲の評価との溝に苦しみ、やがては死を選ぶしかなくなってしまう。

四. おわりに ～帰還後の苦悩を見届けて～

貴公子としての自分、醜悪なる暴力への欲求を持つ自分、そして、英雄ではないことを表明したい自分。混沌とする内なる葛藤の中で、帰還後のニコライ・スラヴローギンは全ての外面を保とうとする。もしくは、それを保つことでしか生きていけなくなっている。ニコライは「よそゆきの冷笑」⁶⁸を浮かべることで仮面を維持し、シャートフに暴力を振るわれた際は、殴られても反撃せず「彼は両手を引っこめて、背中で十字に組」⁶⁹むことで憎悪から快楽を感じ、ガガーノフの息子が「承知しないことはわかっている」⁷⁰譲歩をあえてすることで、決闘を行う。しかし、これまでの自分を維持し、己の快楽たりえる

⁶²前掲注(6) 688 頁

⁶³前掲注(6) 690 頁

⁶⁴前掲注(6) 695 頁

⁶⁵前掲注(6) 692 頁

⁶⁶前掲注(6) 694 頁

67

⁶⁸前掲注(1) 379 頁

⁶⁹前掲注(1) 393 頁

⁷⁰前掲注(1) 445 頁

行動を取りつつも、ニコライ・スラヴローギンは本当の自分を訴えようとする。

「どうしてみなはぼくから、ほかのだれにも期待できないようなことを期待するんです？ なんのためにぼくだけが、ほかの人間には耐えられぬようなことに耐え、ほかの人間には背負いきれないような重荷を背負わなければならないんです？」⁷¹

だが、そんな彼の叫びは周囲と自分、そして自分の中の自分との軋轢を広げてしまい、最終的にニコライが辿り着いた境地は「私にとってはすべてが無縁」⁷²という結論であった。彼はダーリヤへの手紙の中で

「自分のため、また他に見せるためにそれをためしてみたとき、この力は、これまでの全生涯を通じてそうであったように、限りもないものに思えた。」

「しかし、この力を何に用いるべきなのか—それが私にはついにわからなかった」⁷³と語り

「私はいまもって、いや、以前も常にそうだったのだが、善をなしたいという欲望をいざくことができ、そのことに満足感をおぼえる。と並んで悪をなしたいという欲望をもち、そのことにも満足感をおぼえる。しかし、そのどちらの感情も依然として常に底が浅く、かつて非常にのあったためしが無い。私の欲望はあまりに地から弱く、みちびく力がない。」⁷⁴

「私の内部には憤怒と羞恥はけっして存在しえないだろう。したがって、絶望も。」⁷⁵とも書いている。結局、ニコライが自分を測る尺度は偽りの仮面以外なくなってしまい、彼はその内に真の感情を見出すことができなかった。

果たして、ニコライ・フセヴォロドヴィチ・スタヴローギンにとって本当に全てが無縁であったのだろうか。彼は幼年期から外身を重視する生き方を強いられ、外観的な英雄に祭り上げられた。そして、自らも貴公子たらし、その演技に磨きをかけたのである。けれども、虚無なる彼の内面は、構築されていく外面に対し暴走を促すようになった。本当の感情を知らずに育ったニコライには、その暴走こそが快楽となり、結果として彼は自分の力を使う術を完全に見失ってしまう。しかし、私は、マトリョーシャとの一件からニコライが感じた一連の感情、夢、幻、がスラヴローギンの虚空の心を壊しかけたのではないかと思う。希望と悔恨という両極端の感情を夢として見ることで、彼は普通の人間に、自らの力を自らの意志で使える人間になろうと葛藤したのではないだろうか。「悪霊」は革命と暴動という事件の狭間で、生まれながらの悪霊が、人間との境界線を行き来するという側面をもった物語であったのではないかと思う。そして、彼を悩ませた「葛藤」こそ、全ての人間が持つ心の在り方そのものであり、故に「悪霊」という小説は、普遍的人間性を追求すると共に、人間という存在をダイナミックに抉ったリアリズム溢れる小説として、文学史に刻まれるべき作品なのだ。

以上が私の行ったニコライ・フセヴォロドヴィチ・スタヴローギンという人物についての、延いては「悪霊」という物語そのものの考察である。だが、この考察にはまだ不十分な点が存在する。それは「救い」と「神」への言及である。結末からもわかるようにこの小説には「救い」が存在しない。悪魔的超人が人間へと脱皮をはかる、その最後に与えられても不可思議ではないはずの「救い」がこの小説においては与えられていない。そして、それは小説の舞台装置として構築された「革命」と「無神論」と密接不可分なのではないかと思う。なぜなら、彼を形作ったステパン氏は旧世代の代弁者として、また彼の同志であったピョードルには新世代のニヒリストとして、それぞれキャラクターが付与されてい

⁷¹前掲注(1) 552 頁

⁷²前掲注(6) 634 頁

⁷³前掲注(6) 634 頁

⁷⁴前掲注(6) 635 頁

⁷⁵前掲注(6) 637 頁

るからだ。そして、スラヴローギンはその間に置かれるように主人公としての立場が用意されている。おそらく、この舞台と思想的背景の言及なしに、スラヴローギン考察を終えることはできない。「崩壊」という結末が必然であったことを、さらにはスラヴローギンという人物を作り上げた思想的時代的背景を、紐解く必要がある。だが、「救い」と「神」に関する考察を行うためには、私自身の知識が絶対的に不足しており、本稿において取り上げることは叶わない。よって、この点については今後の課題として残し、本稿を「人物」のみを見つめた考察とし、人文科学研究会のレポートとしたい。